おおさき
今昔物語
大崎・このまちの ルーツを訪ねて
その18

“大崎発展”への始発駅、山手線大崎駅ストーリー。

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと 大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『大崎今昔物語』。
その第十八話は、明治34年の開業から今日まで、大崎 のまちの発展と人々の暮らしを支え続けてきた大崎駅の物語。
産業振興と地域活性化に向けて、つねにま ちと共に歩んだ大崎駅の姿がそこにありました。

交通拠点駅としての機能が実感できる大崎駅のロケーション。明治の頃から建設されてきた在来路線（山手線、品鶴線、大崎支線）のもとに、埼京線をはじめ、湘南新宿ライン、りんかい線の新たな大道脈が展開、大崎独自の立地面のポジショニングを築いています。また、山手線の車両が入出庫するJR東京総合車両センター（※地図参照）への分岐点となることから、大崎駅は“山手線の始発駅”となっていることでも知られています。

駅に涼を呼ぶ
七夕の飾り

駅員の皆さん総出の
飾り付け作業

開業から今日まで、115年を経た大崎駅の歴史は、大崎のまちと人の息吹と共にあった駅の歩みを語っています。軍用物資輸送拠点から大崎の工業化を進める貨物駅へ。さらに地元のくらしと活動に寄り添った、地域と共存する駅へ。そこには大崎駅ならではのルーツと変遷がありました。

大崎ニューシティ
誕生時の大崎駅

昭和初期の頃の
大崎駅東口

昭和30年代の
大崎駅西口

“ものづくりのまち大崎”の発展に向けた本格的な歩みの第一歩は、明治の期の大崎駅開業から始まります。貨物駅としての機能を拠りどころとして大崎駅周辺に多くの工場が進出。その後、近代工業都市の基盤を築くと共に、一方で、地元の人々の“くらしやすく、住みやすいまちづくり”に向けた歩みを支援、「まちと共にある駅」としての役割を担っていったのでした。

115周年を迎えて賑わう大崎駅

2016年
開業115周年

100周年記念の千羽鶴アート
（いけばな草月 師範・中田和子作品）

2001年
開業100周年

子供達へ米づくりを指導 する駅員さん

1996～1999年
大崎駅の米づくり

一日駅長とみんなで楽しむ「夢さん橋号」（最近写真）

1987年
ノンストップ山手線発車

昭和35年頃の大崎駅全景

1901年
（明治34年）開業

日本で最初の「私鉄」の駅だった

現在はJR（旧国鉄）の駅である大崎駅も、明治34（1901）年の開業時は、日本で最初に誕生した私鉄（日本鉄道品川線）駅の一つでした。明治政府が民間資本を導入し「品川線」（後の山手線）として開業させた同路線は、北関東からの生糸や米の輸送を主目的とし、赤羽から新宿、渋谷、目黒、五反田、大崎を経て官営の京浜間鉄道駅・品川と接続させる貨物路線でした。この中でもとくに大崎駅は、日清戦争（明治27年勃発）時に、軍用列車を品川で折り返すことなく大井連絡所（後の大井町駅付近）を経て東海道方面へとスムーズに直通運転させるための軍用短絡線の分岐点として機能していました。駅開業後も短絡線（大崎支線）へつなぐ基点駅としての機能から、「貨物駅大崎」の重要度は高まり、“ものづくりのまち大崎”発展への基点駅としての役割を果たしていったのでした。

山手線で唯一、ノンストップ車両が発車！

大崎駅が「山手線の始発駅」であることは多くの人々のご承知の通りですが、ここから年1回、ノンストップ1周の山手線が発車することはご存知でしょうか。それは、1987年の開催から毎年続けられている大崎の代表的まち行事「しながわ夢さん橋」への全面的協力など、多くのイベントサポートを通じて“まちと共にある大崎駅”としての存在感を高めてきました。

前代未聞、“大崎米”を駅構内で耕作！

1996年から4年間に渡り、大崎駅構内の遊休地に実らせた“大崎米”。それは、大崎駅と地元大崎駅西口商店会（綱嶋信一会長）が一つになり“ふるさと大崎”の再発見とまちの魅力づくりに向けて蒔いた種の成果となりました。芳水小学校の生徒達も参加した田んぼ作りや田植え、さらに秋には豊かに実った稲の刈取り。大崎のビルの谷間に吹き込んだ自然の命の息吹は、首都東京の主要幹線、山手線駅での前代未聞の米づくり、夢づくりを実現させたのでした。

人とまちの、豊かな未来への始発駅として

今日、大崎駅前の再開発の進展や多くの路線の接続に伴い、大崎駅の利用客は一日約30万人と、著しい増加を見せています。ものづくりのまちの拠点駅の歴史の上に、新たに交通拠点駅としての歩みを加えた大崎駅。これからも、人のくらしとまちの発展へ、「始発駅」として歩んできた力強い役割を提供し続けてくれることが期待されています。

■資料出典：「品川区史2014」他　■写真出典：大崎駅西口商店会（綱嶋信一氏）所有写真、他